

# おれたちの熱い季節

星野光徳



# の熱い季節

## 星野光徳

河出書房新社

# おれたちの熱い季節

©1978

昭和五十三年二月二十五日初版発行  
昭和五十三年三月三十日再版発行

著者 星野光徳

装幀者 山田 啓

発行者 佐藤皓三

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話 (営業) 〇三―三五五―五三一

(編集) 〇三―三五五―五三二

振替口座 (東京) 〇―一〇八〇二

印刷 亨有堂印刷

製本 加藤製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

星野光徳 (ほしのみつなり)

昭和二十六年一月、札幌に生まれる

昭和四十四年、栃木県立宇都宮高校卒業

昭和四十八年、千葉大学文学部国文科卒業

現在出版社勤務

「おれたちの熱い季節」により

昭和五十二年度文藝賞受賞

現住所・千葉市真砂五ノ三ノ一ノ二〇二

おれたちの熱い季節



## 第一章

### 1

だが、こいつは、俺たちがあの狂気のように熱い〈季節〉の中で、俺たちの心をごんじがらめに縛りつけ抑えつけてくる目に見えぬ資本と権力の重圧を打ち破れと叫んで、何よりも〈理論〉こそが先決だなどと本気で思い込みながら、世界を一挙に否定したいと願う限らない苛立ちと憎悪でみずからを駆り立てていたあの頃、一体どこで何をしていたのだろうか。入社してまだ二年目だというこいつは、俺と同年代で、恐らくあの同じ時期、俺たち同様ひとりの学生として、あの〈季節〉の中にいた筈なのだ。こいつは、一体どんな眼であの〈季節〉を眺めていたのだろうか。どんな思いであの〈季節〉を過ごしてきたのだろうか。それとも、こいつにとっては、あの、俺にとって滾るように熱く苦い時期も、流れる一瞬の時間に過ぎなかったのか。いや、そんなことがあるだろうか。少なくともあの時期、あの熱い〈季節〉にその心に関わら

せなかった学生が一人としていた筈がない。プラスにせよマイナスにせよ、俺たちはすべてあの〈季節〉の中で何らかの意思表示をしなければならないと思っていた筈であり、石のような無反応など許されはなかったのだ。あの大学の熱い〈季節〉に、まだ形も定まらない自分たちの心に何とか形を与えようとする叫びを、叫ばなかった学生がいた筈はない。あの〈季節〉にまさしく権力がそのありのままの姿を開き見せたところの、その象徴としての機動隊の物々しい装備を目の前に、血痕さえ染みつき汚れ黴ずんだ赤旗振りかざして、俺たちは、内容も定かに聞きとれぬスピーカーによる切れ切れのアジテーションと割れるような怒号のただ中、生まれて初めての緊張で若い叛逆の叫びを叫ぼうとしたのだ。一寸先も見えない濃霧のように俺たちを覆っていたあらゆる権威や権力のまやかしの部分が、目の前で見える見る暴露されていくのを、若く稚い俺たちは希望と絶望とを入り混らせた涙ぐむような昂奮で見据えもし、また、その暴露のためにあの致命的に若い闘いを組もうとしたのではなかったか。俺たちはそのために、〈主体の確立〉とか〈自己否定〉とかいう観念の突き詰めたその極点に立とうとして、未熟で潔癖で絶望的な叫びを上げたのだ。そうだ。それがあの〈季節〉の中にいた圧倒的な学生たちであった筈だ。……しかし、こいつは、そのとき何をしていたのだらう。友人たちの希望と絶望を尻目に、休講となし崩しの機動隊導入の続くあいだ中、遊ぶ金を稼ぐためのアルバイトに走り回ってでもいたのか。勿論そんなことはこいつの勝手だ。こいつがどんな学生であっ

たかなど、俺の知ったことではない。だが、そのとき俺たちは何をしていたか……

アルバイトならば、家族からの仕送りなど当てにできなかった俺たちこそ、食うために真剣に捜さなければならなかった。あの熱い〈季節〉の活動資金のためにも、俺たちは未熟な労働力を、不慣れでその単調さのために苦痛な作業に売らねばならなかった。ただ、あの頃の俺たちは、ひと月分のピラを作るためにひと冬と同じ上着を着続けることを恥かしいとは思わなかったし、立て看板を書く絵の具のために食事を一日一食に切り詰めることを、さして苦とも思わなかったただけだ。つまり、〈理論〉を否定することができなければ、その〈理論〉に従わねばならないというのが、俺たちのあの〈季節〉を支配した倫理<sup>きうりん</sup>であつたのだし、その〈理論〉自体が何を現実的な根拠としていいのか疑いもできないほどに、俺たちにはそれ以外の世界はなかったのだ。そのために、例えば或る一人は死を択んでしまうほどに追い詰められたのだ。それなのに、こいつは……

武井は、ああ、俺はまた考えているな、と心に苦々と呟くと、引き出されかけた記憶の連鎖を慌てて胸の見えない裏側に仕舞い込もうとして、しかし、いま目の前の大勢の組合員たちに取り囲まれた若い男に対して、ふつふつと心に鳥肌立つような苛立ちをいつの間にか感じている自分に気がつく。

Sと呼ばれたその若い男は、W出版社では半数近い非組合員の一人であるらしい。彼は、異

様にか細く骨ばった手にペンを握りしめて、その指は進化から取り残された猿のような卑屈な熱心さで小刻みに動いている。W出版労組経理班の、Sを取り囲んでいる人々の殆どは女子組合員であるが、彼女らはまるで何かに駆り立てられるように昂奮して殆ど蒼ざめ、ひとり団結の文字を染め抜いた赤い腕章も巻かずに彼女らを見下したほそ目の無表情で帳簿の整理を続ける若い男に対して、口々に詰るような説得の言葉を投げる。

「Sさん、あなただって労働者でしょ。こっち向きなさいよ。そんなに経営者に媚びるつもり？」

「組合に入っ、一緒にやりましょうよ。」

「仕事やめなさいよ。スト破り！」

会社側は数日前、非組合員だけを集めて内容の曖昧な懇談会をもち、すでに彼らだけには、年度初めに会社側が一方的に示した定期昇給分を加えた俸給が支払われたという。組合員組織率五〇パーセント足らずのW出版労組は、すでに五月に入ろうとする、だからだと長期化して張りを失ったような春期闘争の中で、もう十回以上の時限ストを設けて、共闘労組の支援を仰ぎながら対経営団交と非組合員への説得に当てた。それは、W出版労組にとっては一年中工作され続けねばならない最も基本的な組織活動であり、またそれは常時少しづつ行なわれ、毎年いつも春闘から夏期一時金闘争、年末の闘争の時期に、集中的に気まずく息苦しい対立の気配

として現われる、相も変わらぬ苛立たしい説得活動なのだろう。

武井たち、W出版労組支援のために動員されてきている近隣地区内労組や同業会社労組の組合員は、当該労組の女子組合員たちの輪を囲むようにして立ち並び、〈団結〉や〈要求貫徹〉と貼り紙された壁に沿って伝染してくる鬱陶しい苛立ちの中で、すでに小一時間近い一方的な繰り返しを聞いているが、ときにその中の何人かは思い出したように、女子組合員たちの昂奮を分担して非組合員に対する非難や詰問を浴びせながら、午前中だけの職場占拠という指名された動員の目的を、それぞれの微かな倦怠を喉の奥に吞み込みつつ果たしているのだ。彼らは恐らく、昼の食事のことか午後からの業務の手順などをふと考えながら、それでも、少なくとも会社が高くふっかけた要求の半分ほどは賃金の増額を果たさなければと、自分の生活の細部まで数えあげ金銭に換算して、他人の職場にまで支援の組合旗を持ち込んでいるのだ、と武井は思う。そうだ。あの〈季節〉に、あらゆる権威と権力による抑圧の予感と、何よりもそれを容認してしまいうる自分自身とに対して、俺たちが心の奥深くから振りかざそうとした赤旗黒旗と、ここで振られている赤旗とは、同じではない。ここで振られているのは、ひたすら生活のための旗だ。人々はそのに、必ずしも階級の〈理論〉や、根源的な生の意味や自己存在の社会的な全重量をこめている訳ではない。色褪せ汚れくすんだ赤地の布に染め抜かれた〈団結〉の文字に組合員たちがいま認めあうのは、生活の安定以外ではない。つまり、労働組合と

はそういうものだ。それ以下ではいけないし、それ以上のところへもなかなか抜けられない、それにとって過不足ない論理だけが通用する。

重ったるく居心地の悪い、饅えたような空気が、南側の窓を隔てて差し込んでくる煤けた光に暖められて膨張する気配は、肌に不快だ。煙草の煙と人いきれで生暖かく濁っている部屋の空気を、女子組合員たちの甲高い声が更に攪き混ぜる。妙に白々と明るい鬱陶しさの中で、罵声も沈黙もそれ自身がまるで目に見えぬ軟体動物のように、べっとりと首すじから腋の下へと滑り込み纏いついてくるようだ。誰もがこの気まずい時間を、何とか早くやり過ごしてしまおうと願っているに違いない。女子組合員たちの説得の声は、部屋のもう一方の隅で経理担当取締役らしい男に対して張り上げられる硬直した声々に急ぎ立てられて、次第に口穢く、追及から悪罵へと募っていくかのようだ。

「甘えるんじゃないわよ！ 労働者を何だと思ってるの！」

労働者？ そう、労働者とは何か。武井は、その部屋の隅に共闘の腕章を巻いて立っているだけの自分までが、微かに昂奮して考えているのに気づく。Sと呼ばれた青年はそれでも表情を変えようとはせず、しかし彼自身の苛立ちも間歇的にその頬をびくびくと痙攣させ始める。

袖をまくり腕を胸の前に組んだ恰好で、女子組合員たちの背後から状況を見計らっていたらしいW出版労組の書記長らしい貧弱な体格の男が、武井の横をすり抜けてゆっくりとSに近づ

く。彼は今朝方、動員されてきた支援労組員に向かって挨拶と現状を報告した人物だったが、彼がいまW出版労組を指導する立場にいる人物であることは、その彼自身も意識しているらしい態度と眼鏡を透した眼の色とで判る。どうやって相手をその政治的かけひきと組合の論理で圧倒し説得するかということを意識せずにはいられない眼、ああ、そんな眼の色をした連中は確かにあの〈季節〉の大学にもいたと、武井に思い起こさせる、その眼はすぐに不自然なほどの深刻さを凝らして、Sを見おろす。その声は、女子組合員たちの素朴な昂奮とはおのずから違わなければならないことを意識した、わざとらしい沈着な響きだ。一種の政治的かけひきを指導するという立場と責任とが、人の態度から眼つきまでを変えるものであることを武井は今でも不思議に思う。

「Sくん……君ももう新入社員じゃあるまいし、組合組織というものがどんなものか、判らん訳はないだろう。どういう積もりで強情を張っているのか知らないが、君が主観的にどう思うと、君が組合に入らずに我々のこの闘いに背を向けているという現実、それだけで十分反組合的な反労働者的なことなんだよ。だが君は、我々組合員が闘いといった成果にだけは、おぶさろうとしているんだ……」

無精髭を伸ばし、気の毒なほどにぶ厚い近眼鏡をかけた小男は、それでもできる限り自分の説得を冷静で論理的に聞こえるようにと周りの女子組合員を意識しながら、落ち着きを示すた

めか言葉の途中に意味もない薄笑いをさしはさんでみせる。その貌はまるで鼠だ。

しかし、それは貧しい論理だが、多分正しくない訳ではないのだ、と武井は考える。結局はその論理に従ったところで、自分もここへ来ているのだ。確かに俺たちが主観的にどう思い込んだところで、俺たちが賃労働者であることに変わりはない。そして労働者が主観的にどう思い込もうと、搾取する者とされる者との関係は変わらない。それに伴って支配する側とされる側という社会的構造は依然として変わらないのだ。……確かにそれはその通りだろうが、しかし……と武井はかつての若い観念をなぞってその先の言葉に詰まり、頭の隅を掻き回す。自分もW出版労組の女子組合員たちの火照った表情に、いつの間にか圧倒されているらしい。「何とか言いなさいよ！ Sさん。」彼女らの張り上げる声には、確かにまだ大学を卒えたばかりの青二才など圧倒し滅入らせるには十分な、物質的執着力とでもいうべき即物的な現実主義の生々しさがある、と武井には感じられる。彼女らは恐らく、俺たちが〈理論〉と〈永遠〉とに拘泥して或る一つの観念を追いつめている間にも、物質的報酬こそを最も痛切に皮膚と粘膜とで感じとる世界に生きていたのだ。俺たちはあの〈季節〉の中で〈労働者大衆と連帯して〉などと腐るほど唱えはしたが、現にいま俺の目の前にいる彼女らのことなど、考えたことは一度としてなかったのだ。では、一体あの頃、俺たちはどんな人々を指して〈労働者大衆〉などと呼んでいたのか。武井は、壁といわず窓といわず貼りめぐらされたステッカーの〈満額よこ

せゝへ生活を守れゝの文字をぼんやりとした視界に眺め、急激に何かしら白々とした思いに胸を充たされる……しかし、俺だって今は労働者ではないのか……

武井は、土曜日に〇駅の傍の古書店で偶然に逢った篠原のことを思い出した。あの〈季節〉の武井たちのグループの中で最も若く、最も観念的で最も熱心な活動家であつた篠原次郎に会うのは、殆ど二年ぶりだつた。

「武井さんじゃないですか。」相手は人なつこそうな笑顔でこちらの肩を叩いたのだつた。新調らしい三つ組のスーツと、きちんと七三に分けられた短かい髪には、かつての汚れた長髪の学生活動家の面影はなかった。何よりも篠原の若やいだ笑顔には、三年前のあの、全てに対して挑戦的にならずにはいられないといった棘々しさがなかった。あらゆる議論の中で篠原が決まつて示した、あのつねに不満足そうな苛立ちで眉の間に寄せる縦皺や苦りきつた表情、ふた言目には「徹底的に」と言いたがつた敵意のような若い飢えの目の光、そしてそれらによって作られていた篠原らしさは、何か別のものにとつて変わられたように武井には見えた。「武井さん」などというよそよそしい呼び方も、あの〈季節〉の篠原はしなかつた筈であつた。武井は、これから交されるであろう会話に、微かな疲労を予感した。

近くの喫茶店を選んで入ると、篠原は先に立って、外の通りに面してガラス張りになつてい

る窓際の明るい席まで行つて腰を下ろした。武井は、そのような大きな窓際の明るい席に坐ることに、一種の気恥かしさを覚えた。あの〈季節〉に、屢々そこで会合をもつた薄暗い喫茶店の、そのまた暗い一隅をわざわざ選んで俺たちは集まつたものだった。篠原はその一番隅にいつも腰掛けたものだったのに、と武井は思った。

「本当に久しぶりですねえ。A出版に勤めたつていうのは聞いてましたけど。」

「工・文共闘の解体以来だよ……」

武井はぼそりと応え、相手は微かに自嘲めいた笑いを口元に浮かべた。

「いろいろありましたからねえ……」

篠原は照れ臭そうに煙草に火を点けると、背広の内ポケットを探つて自分の名刺を取り出し、テーブルの上に差し出して見せた。

「いま、M工業の機械輸出課にいますよ。寄らば大樹の蔭っていう訳じゃないけど、就職しない訳にもいかないしね。反階級的って言われるかな。」

篠原は眉をしかめて見せ、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。話が途切れると、後の席に坐っている女子大生らしいグループの笑いさざめく声がいやに甲高く聞こえた。

武井は何とない不愉快を感じた。……あれはまだ「いろいろありました」などと言って苦笑し合うほど過去ではない。そして、二年ぶりに再会したあの〈季節〉の仲間同士が、会って早

早に名刺を差し出して見せながら自嘲を示し合わねばならないほど、俺たちは卑屈にはなっていない。労働組合が機能しないような大企業に職を求めたからといって、それが反階級的という訳ではない。しかし、それを知らない訳ではない篠原が、何故わざわざ「寄らば大樹の蔭という訳ではない」などと、またそれを知らない訳ではない俺に向かって、弁解めいた言葉を挿まなければならぬのだろう。

武井は、自分の前であの〈季節〉への懐しさだけを示して、実際のあの〈季節〉からは完全に隔たってしまった苦笑を、篠原次郎の童顔に眺めたのだった。そのような苦笑は、むしろ健康な若者の悔悛の兆候として君の会社の上司にでも見せてやればいい、俺たち自身の間ではあの〈季節〉は苦笑すべきではないのに、と武井は思った。

武井の背後の女子大生や窓の外を歩いていく学生たちの方へ視線を泳がせていた篠原は、煙を大きく吐いてから、またポツリと言った。

「今の学生はのどかでいいな。俺は今でも時々、お志津さんのことを思い出しますよ。」

武井の心がびくりと動いた。その言葉は意外だった。高沢志津子の名前は、今でも武井の心にひっかかったまま、外れようとしなかった。武井は、窓からの光の反射で却ってよく見えない相手の顔が、不意に自信なさそうに歪んだように思った。

「山本さんは、どうしてるでしょうかね。卒業してから、連絡はありましたか。」

志津子の名前が出れば、そこから連鎖的につながって思い出される名前だった。篠原は、あの〈季節〉にグループを組んだメンバーの一人ひとり思い出しているふうに、焦点を結ばない視線を宙に泳がせた。

志津子の名前が篠原の口から洩れたとき、武井の中にも、山本執一の暗く翳った顔は一つの連鎖反応のように像を結んだ。……否応もなく俺をあゝの〈季節〉の中に引き込み、あの六号館封鎖から機動隊導入によるC大闘争の壊滅まで、俺たちを引っぱって走った山本執一は、一体どうしているだろうか……。何か苦く不透明な思いが、そのとき武井の胸を掠めたのだった。

と、それまで一方的に非難に晒され、強張った無表情で同僚らの視線に堪えていた囲みの中の若い男が、それまで頑なに守ってきた沈黙を破った。彼はやっと平静を保っているという様子で震えるペンを休め、血の気の引いた顔に無理につくろうとする薄笑いを浮かべて呟くように言った。

「ぼくは……組合の足を引っぱってはいませんよ。」

勿論、取り囲んだ組合員たちは、すでに論破されて根拠を失った筈の彼の弱々しく居直った繰り返しに、或いは冷やかな呆れの、或いは明らかな憤激の表情を露わにする。

「ぼくは、組合には反対しない。だけど加入するかしないかは、ぼくの自由でしょう。それに、